

発掘調査の概要

キトラ古墳石室内の調査(飛鳥藤原170次)

キトラ古墳壁画の取り外しが、2010年秋に無事終了しました。奈良文化財研究所都城発掘調査部では文化庁の委託を受け、壁画の取り外された石室内の考古学的調査をおこないました。調査の主な目的は、床面に残る漆喰の状況および壁画や漆喰取り外し後の石材表面の精査と、石室構造についての検討です。調査は奈文研、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の3機関による合同調査で、調査期間は2011年6月13日～24日の2週間でした。

調査の結果、床面の漆喰上に棺台とみられる痕跡を確認しました。床面には、東西両端に幅約18cm、北端に幅約20cmの漆喰が良好な状態で残存する部分があり、その表面は後世の土砂の流入により、茶色く汚れていました。そして、その内側には他よりも白色を呈する漆喰が幅約3cmの帯状にのびる状況が認められました。このような床面の状況から、内側の帯状にのびるきれいな漆喰上に棺台が置かれていたと考えられ、ある程度の期間、床面漆喰上に棺台が載っていたため、土砂による土汚れを免れたと想定できます。棺台の痕跡が確認できたのは北辺、東辺、西辺の3辺であり、南辺については漆喰の残存状況が悪く、残念ながら確実な位置を特定できませんでした。

棺台痕跡の東西幅は68cm、南北長は西辺で137.5cmが残っていました。棺台が石室のほぼ中央におかれていたと想定すると、棺台の長さは約2mに復元できます。棺台の痕跡は高松塚古墳でも見つかっており、大きさは幅66cm、長さ217cmと想定されています。高松塚古墳では棺自体の大きさが幅58cm、長さ199.5cmであることが判明しており、床面漆喰上

で検出された痕跡が棺の大きさを上回ることから棺台の痕跡と特定されました。キトラ古墳の場合、棺の大きさは不明ですが、床面漆喰上の痕跡の幅は高松塚古墳の棺台痕跡の数値と近似しています。

キトラ古墳における棺台の痕跡は、2004年に撮影したフォトマップを通してその存在を推測してきましたが、今回の精査で、それとほぼ同様の位置で痕跡が明瞭に残存する状況があきらかとなりました。

また、石材表面の精査をおこなったところ、赤色の顔料で引かれた線の一部を約70ヶ所で確認しました。途切れている部分を補って復元すると、朱線は計20本になります。これまで判明していたものは床面1本、天井5本の計6本でしたが、漆喰を取り外したことで朱線が明瞭に観察できるようになり、今回の調査で新たに14本が確認されました。これらの朱線は石材の外周縁にみられるものが多く、主に石材を加工する際の基準線として利用されたものと考えられます。

更に、壁石を精査した結果、石室の入口部を閉塞する南壁石の高さが、他の壁石よりも2cmほど低く加工されていることが判明しました。これは石室の開閉を容易にするための意図的な工夫と考えられますが、その結果、南端の天井石が南に向かって傾き、その北側の天井石との間で、天井面に1cmほどの段差が生じている状況があきらかになりました。

今回の調査では、これまで実施できなかった床面上の精査により、棺台の痕跡が良好に残存していることが確かめられました。また、朱線や石材の加工状況等、石室の構築方法についての重要な知見が得られました。今後、これらの調査成果を、キトラ古墳の構築過程の復元や保存・活用に役立てていきたいと考えています。

(都城発掘調査部 若杉 智宏)



床面の棺台痕跡（南から）



天井石の朱線（左が東、下から見上げる）